伝統と現代をつなぐ刺し子作家銀座亜紀枝の技法

Sashiko artist Akie Ginza's technique connecting tradition and modern times

木林　祥子
Shoko　Kibayashi

近年、衣料品の大量廃棄が社会問題となっている。その背景には、流行の商品を低価格で販売するファストファッションの台頭がある。多くの選択肢の中から、いつでも低価格で手に入れることができるファストファッションは、大量廃棄されることが前提で製造されている。このような、大量生産、大量消費の社会に限界が見えてきた現在、日本や世界の各地に残る生活文化の中に、新しい文化をつくり出す鍵が隠されているのではないだろうか。本稿では、その鍵のひとつとして、日本の伝統文化である「刺し子」について紹介する。庶民が日々の暮らしの中で生み出し、厳しい生活の中にあっても、美しさを求め、針と糸だけで、様々な模様を表現した刺し子の技法は、今も多くの支持を得ている。近代刺し子作家の銀座亜紀枝は、刺し子をほどこした布を、手縫いで洋服に仕立てることで、伝統的な刺し子に込められている知恵と工夫を、世界に誇れる価値として、伝え、表現している。持続可能性が求められる社会において、かつての強いられた労苦とも、また単なる趣味とも違う、新しい刺し子の技法は、未来につなげるべき、誇るべき財産として、ますますその価値を発揮していくだろう。

キーワード：刺し子，Sashiko
銀座亜紀枝，Akie Ginza
ファストファッション，fast fashion
衣料品の大量廃棄，mass disposal of clothing
持続可能性，sustainability

１．はじめに

近年、衣料品の売れ残りと衣料廃棄物の増加が社会問題化している。衣料品の大量廃棄の問題について、ウィメンズ・エンパワメント・イン・ファッション創設者の尾原は、日本に古くからある、資源を無駄にしない「もったいない」という考え方について挙げ、「そのDNAを学び直し、サステナブル（持続可能）なアパレルや消費財で世界をリードすべき」と述べている[1)]。私は、日本の伝統文化の一つである「刺し子」こそ、サステナブルなアパレルであり、資源を無駄にしないDNAを受け継ぐ技法であると考える。

私は刺し子の技法を習い始めて10年になる。私が刺し子を始めたのは、異文化理解において、刺し子が大変優れた教材であると考えたことがきっかけである。刺し子は、日本の伝統文化であると同時に広く世界に見られる技法でもある。

国際社会の指標であるSDGs（持続可能な開発目標）の採択から5年が経過し、SDGsの認知は国際的に高まってきたといえる。地球の状態に対する危機感も世界的に共有されてきており、2030年を目標に、あらゆる人々が達成に向けた努力を強めていくことが必要になっている。私は、学生たちが、刺し子について学ぶことを通して、大量廃棄を前提とした大量生産、大量消費のシステムについて見つめ直し、意識と行動を変えるきっかけにできるのでは、と考えている。本稿では、高度経済成長期に入る以前の刺し子と、今も多くの支持を集める現代の刺し子について、それぞれ一例を提示し、刺し子を学ぶ意義について示したい。

２．大量廃棄される衣料品

２－１．大量廃棄の現状

小島ファッションマーケティング（東京都渋谷区）によると、衣料品の供給量は、1990年は約11億点で販売量とほぼ変わらず、需給バランスが保たれていた。しかし、その後販売量は横ばいにもかかわらず、国内に出回る衣料品数は年々増加している。2018年には、90年の約2.5倍の約29億点まで膨らみ、その半数以上、約15億点が売れ残り、日本国内において年間10億点もの服が、誰も袖を通すことすらないまま、廃棄されているのが現状である[2)]。

２－２．アパレルメーカーによる廃棄

大量に売れ残る背景には、流行の商品を低価格で販売する「ファストファッション」の台頭がある[3)]。そこには、「捨てることになってもたくさん作ったほうが儲かる」業界の実情がある[4)]。

アパレルメーカーは、世界的な規模での分業体制を進めることで、大幅に価格を下げることを実現してきた。ファストファッションは、生産コストが抑えられる中国や東南アジアなどの工場で大量生産されている[5)]。

ファストファッションの特徴の一つは、企画から販売までのサイクルが短く、トレンドを反映しやすいことである。費用が安い分、質が落ちたとしても、流行は長くは続かないので、「安くおしゃれをしたい」と、コストパフォーマンスを重視する消費者に支持されている。

人件費の安い国に大量発注することでコストを抑え、流行のサイクルを短くし、低価格の商品を短期間で入れ替える。前シーズンの商品価値を下げて、新しい流行へ消費者を誘導し、前シーズンの商品を大量に捨てることになっても、全体として利益を上げていく構造になっている。

大量に売れ残る背景として、洋服の需給調整が難しい点も挙げられる。服は、半年から1年前に流行の見込みを立てて発注するが、外れることも多い。例えば冬物のアウターなどは、寒ければ売れるが、暖冬になると売れ残ってしまう。一度発注してしまうと、生地の調達や裁断、工場での縫製など、工程が進んでいくため、途中で軌道修正して別のデザインにしたり、数を減らしたりすることは難しい。

売れる量が予測できないため、多めに作るか、または客を待たせるか、のどちらかになるのだが、販売機会を逃すと不利益が生じる、という考え方のもと、多めに作って余らせて捨てる、という現状になっている。その考え方の根底には、客を待たせない、たくさんの商品の中から選んでもらうため常に多くの選択肢を準備しておく、といった、過剰なサービス社会が背景にあるともいえる[6)]。

２－３．リサイクルの現状

店頭回収を始めとして、古着回収は身近な存在になっており、リサイクル意識も高まり、古着の回収量は増加している。古着の一部は、リユースとして、海外に輸出されている。中古衣料の輸出先としては、かつては、中国が大口であったが、現在、経済成長を果たした中国は、むしろ、古着の排出国となり、十数年前から中古衣料の輸入を禁止している。フィリピンなどのア

ジア諸国やアフリカでも輸入規制を始めるようになり、輸出は年々難しくなっている。

（1）リサイクル不能品

古着のリサイクルとして、工場向けのウエスにする方法があるが、化学繊維はウエスにはできない。綿と違って、水や油を吸収しづらいため雑巾に向かないからである。

現代は、ポリエステル、ナイロン、アクリルなど、様々な化学繊維を混合した複合繊維の服が増えている。繊維を組み合わせることで、保温力や消臭力、軽量化などの高機能を付加している。化学繊維は、着る人には、安くて快適であるが、リサイクルがとても難しい繊維である[7)]。

（2）新しい服を売るための戦略

大量のリサイクル衣料は、輸入規制やリサイクル不能品の増加によって、行き場を失い、実際には循環されないままゴミとなってしまうことが少なくない。しかし、古着の店頭回収や、自治体の資源回収によって、消費者は、捨てる服を「資源」と捉え、回収された先について考える機会がない。店頭回収は、メーカー側が、新しい服を売るための戦略でもあり、消費者が罪の意識を感じることなく手放すように促している面もある。消費者が服を捨てやすく、そして新たに買いやすくするためのリサイクルになっているのが現状である[8)]。

２－４．大量廃棄の問題点

これまで述べた問題について4点にまとめる。①多くの選択肢の中から、いつでも、低価格で手に入れることのできるファストファッションは、大量廃棄が前提となって生産されている②短期間で流行の商品を入れ替え、前シーズンの商品を大量に廃棄している③リサイクルが大量消費を助長し、大量廃棄につながっている④着る人には安価で快適な化学繊維はリサイクルが難しい。

これらの問題点を、刺し子という伝統文化を通して捉えなおしてみたい。

３．江戸・明治・大正期の刺し子

刺し子とは、布地の補強や保温の目的で布を重ね合わせ、一針抜きに縫う技法をいう[9)]。ここでは、刺し子の生まれた時代背景と、東北・関東・中部地方に少しずつ形や呼び名を変えて存在した「百ハギギモン」の風習について紹介する。

３－１．刺し子の時代背景

刺し子は、東北地方に生まれた庶民の芸術である。それは貧しい生活の中で生き抜いていくための必然から生まれた技術であった[10)]。

庶民が身に付けていた麻は、肌触りも悪く、保温性に乏しい素材で、寒い地方の衣類としては不適当なものであるが、苧麻は自生しており、大麻も服の材料として一般に栽培されていたので、長年、麻だけに頼ってきた。

麻を布にするためには、成長した麻を根元から切り、川の中に1日漬けて、次の日、天日で乾かし、また川に漬ける作業を数回繰り返した後、何日か天日で乾燥させる。これを蒸して皮をはぎ、繊維を取り出し、糸を撚るという重労働の後、手織り機にかけてやっと1枚の布が出来上がる。家族一人の衣服を整えるのにも、農作業の合間の仕事であるので、大変な仕事であった[11)]。

貧民は襤褸（ぼろ）を着、補強しては、常着とし、終身、新衣を着たことがないというのが一般的であった。この大切な襤褸の着物を補強する技術として、東北の特色ある刺し子が生まれた。朝の暗いうちから、夜の暗くなるまで、田で働く農家の女性は、その労働の終了した夜や冬の仕事として、この襤褸に刺しを入れた。その刺しの仕事をすることも、また大変で、刺し子のことを女性たちは「寝ず刺し」と呼んでいた。暗い明かりのもと、眠い目をこすりながら、寒い部屋での縫い刺しは、まさに修行といえる。一針一針、親の、夫の、子どもの着物を土間に通う下座の筵（むしろ）の上で刺す毎日は、涙と祈りの日々であったという[12)]。

このような状況の中で、お産に呼ばれた産婆は、赤子を無事取り上げても、家の中を見回し、衣類がないとわかると、空の塩叺（かます）（塩を入れるための筵で作った袋）に生まれたばかりの赤子を入れ、足でギュッとつぶして赤子の生命を絶つ間引きを行っていた。この間引きの難から赤子を救うために作られたのが継ぎ刺しの産着「百ハギギモン」である。

３－２．百ハギギモン

「百ハギギモン」は村の中で60歳以上の健康な老人の衣類の端切れを100枚集めて縫い合わせ、その継ぎ目がほつれて破れ目から悪魔が入ったりしないように、みっちりと刺しを入れた産着である。この風習には、次の3つの意味がある。

（１）一枚一枚の端切れには、60年以上生きてきた寿命と幸福が染みついているので、これを100枚集めれば、6000の寿命と6000の幸福が授かるというわけである。間引きに遭う赤子を何とか救おうとする村の女子衆の知恵の

衣服であった。

（２）赤子に衣服がなければ、無言の合意で間引きされてしまうという状況の中で、布切れを持ち合わせている人から恵を分けてもらう手段でもあった。貧乏ゆえに会得した継ぎはぎの技術を逆手に使い、幸福と結び付けた庶民の知恵である。それは、小さい小切れの力を合わせ、大きな力として、赤子の救済を村全体でやろうとする救いの衣服であった[13)]。

（３）子を宿したばかりの母親予備軍の女が、布を頂戴しに歩くことで、母はまず100人の人に語り掛け、子どもの存在を告知する。たとえ見知らぬ間柄であったとしても、一枚の端切れをやり取りすることで、初めて縁が結ばれる。生まれる前からこれだけの人に知られ、縁の輪に囲まれれば、新しい命も、心丈夫である。布を所望された人々も、関わった子のその後が気にかかり、案じて母親にも時折声をかける。お産や子育ての心細さをかき消す衣服でもあった[14)]。

刺し子が、女性たちの知恵と技術の結晶であり、家族への祈りが込められたものであることがよくわかる事例として百ハギギモンについて紹介した。しかしそれは、百ハギギモンの事例に限らない。刺し子は、女性たちが祈る思いで刺し、傷んだら繕い、擦り切れたらまた刺す、そういった単調な作業を繰り返し、一枚一枚、いとおしむように手をかけ、布の命を長らえさせていた姿を物語っている。

４．現代の刺し子

現代の刺し子について、刺し子研究の第一人者である徳永は「本来の刺し子とは程遠い、従来の形、技術を模倣しただけの繕い遊びだ」と嘆いている。それに対して、杉野は次のように述べている。確かに現代の刺し子は、防寒、補強といった本来の実用的な目的は求められていない。また、本来の刺し子とは、有り合わせの布と糸によるものであったのに対して、近年出版されている刺し子の書籍には、「刺し子専用」の糸・針を使用するといった傾向が見られる。しかし、心を込めて一針一針進めているという点では、現代人も昔の女性も違いはない。初めての刺し子に選んだキットのデザインがディズニーキャラクターであっても、それは間違いなく刺し子である。刺し子のデザインとは決められたものではない。作り手の自由な発想が「刺し子」の存在を支えてきたのである、と述べている[15)]。

昔の女性たちが、厳しい生活の中にあっても、美しさを求めて、針と糸だけ

で様々な模様を生み出してきた技法の魅力は、今も多くの支持を集めている[16)]。

刺し子の書籍を調査した杉野は、近年の刺し子に関する書籍には、刺し子を用いた洋服のデザインがあまり提案されていないことを指摘している[17)]。ここでは、ファストファッションとの違いを明確にするため、現代の刺し子の一例として、44年にわたり刺し子の服作りに重点を置いている刺し子作家銀座亜紀枝を紹介する。

４－１．刺し子作家銀座亜紀枝の技法

銀座は、近代刺し子の草分けとして、刺し子界をリードし、現代感覚にあった独自の刺し子を伝えている。銀座は、昭和6年生まれ、現在、全国に5店舗、21の刺し子教室を開いている。刺し子の美術館である刺子館を設立し、書籍3冊、教本100冊を超える著作がある。

（１）銀座の刺し子の特徴は、刺し子の針目にある。刺し子の針目を、1mmぐらいから、15mmぐらいまで用い、それも1本どり、2本どり、4本どりと、自在にして、立体感を出すことが特徴である。図1の刺し子は、細糸、太糸、1本どり、2本どりを組み合わせ、立体感を出していることがわかる。

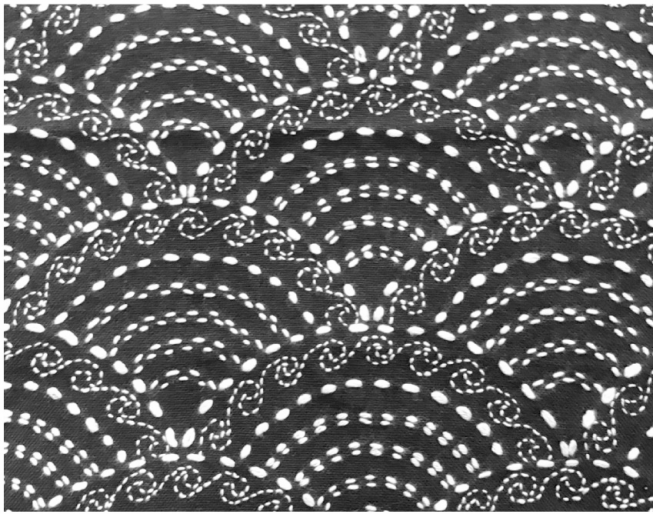

図1　刺し子「波入り青海波」

（２）銀座にとって刺し子と手縫い仕立ては一体である。刺し子の醍醐味は手縫いのほかにはないとし、仕立てにミシンは使わない。また、刺し子の布には、本藍染・草木染の布を使用しており、藍染め・草木染めの良さを引き立てるのは、手縫い仕立ての刺し子の服であるとしている。藍染や草木染の布は特に、手作りの人々の心を込めた作業の結晶である。銀座は、そのいとおしい布をいかに裁断せずに服をつくるかを模索、裁断する場合も、浅く、単純に、まっすぐに裁断することを考えた洋服作りを提案している。図2、図3は、「切らない」「縫わない」「前後に廻せる」「余り布を出さない」を主

眼にデザインした洋服の例である[18]。以下、銀座著『手縫いの洋裁 第1巻』より抜粋する。「直線裁ちのものは、流行がなく、太っても痩せても着られ、それをほどけば巾が丸ごと使えて更生に便利です。形がストンとしているので着てベルトをしたり、袖をまくったり、前と後ろを交互に着ることも容易であります。

また、木綿で作ると同じ一枚のものが一年中着られるのです。長袖なら少しまくって半袖位に折ると、ラフな夏の着こなしになり、ノースリーブは真夏の素肌に、合いと冬は下へ着込んでポンチョやジャンパースカートに変身いたします。その上に前と後ろが同じですと、無作為に着ることができる外、腰のあたりが傷みにくいでしょう。

直線裁ちは家庭着から外出・訪問、パーティー、冠婚葬祭まで全部着られます。〔中略〕着流しが気になるときは、ゴムかひもで締めるとかなり体型になじみ動き易くなります。普通の洋服ではあって当たり前のチャックやボタンすら直線裁ちにはあまり用がありません。どうしてもボタン位ほしいときは、くるみボタンで共布でくるみ、ひっかけは、布に穴をあけるとかわいそうなので、ループにします。」

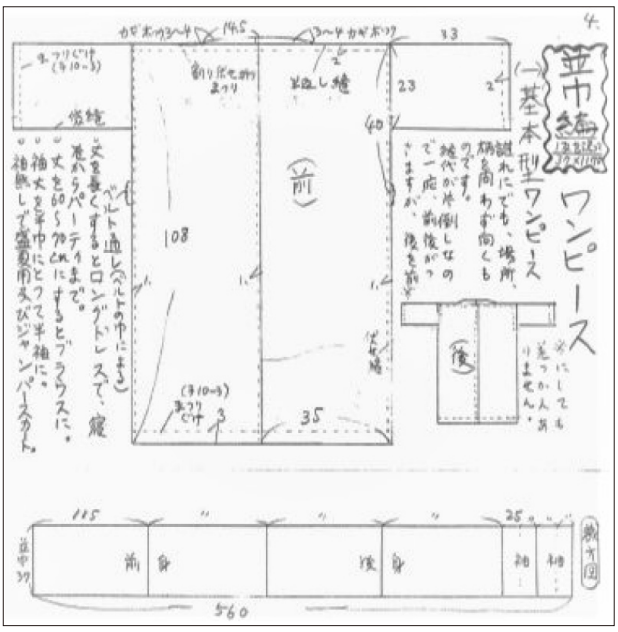

図2　基本型ワンピース

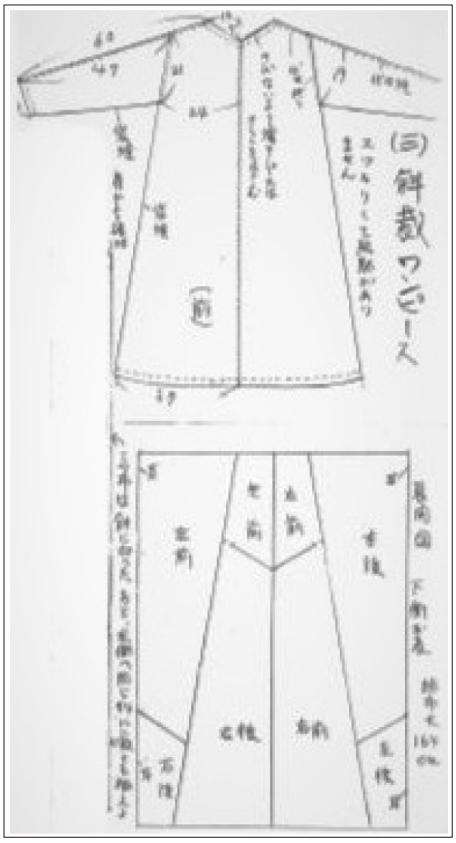

図3　斜断ワンピース

４－２．銀座の技法の特徴

これまで述べた、銀座の刺し子および洋裁の特徴をまとめると、まず、銀座独自の刺し子の針目の特徴が挙げられる。伝統的な刺し子が、細かいぐし縫いの連続で模様を作り出しているのに対し、銀座の刺し子は、ひとつの作品の中に、小さな針目から大きな針目まで、また1本どりから4本どりまで自在に取り入れている。この銀座独自の針目は、作品に立体感を出すと同時に、大きな作品を比較的短時間で制作することを可能にした。そして、この独自の技法は、作り手の個性や自由な発想によって、無限の創造的作品を生み出している。

次に、制作過程においては、「小豆3粒をくるむことができる布は捨ててはいけない」、と言われているほど、一切の廃棄がないことが挙げられる。また、手縫いで仕立てた洋服は、一年中着ることのできる素材およびデザインで、サイズも流行もなく、年齢も選ばない。冠婚葬祭など、ハレの日にも着ることができる。刺し子をほどこすことによって布を丈夫にし、前後なしのデザインを廻して着ることによって、同じ箇所への負荷を防ぎ、服を長持ちさせることができる。さらに、直線裁ちで極力裁断しないデザインを、ミシンではなく手縫いで仕立てているため、別の物に作りかえるのも容易である。素材は綿100％なので、最後の最後まで、リサイクルが可能である。

銀座は、刺し子をほどこした布を、手縫いで洋服に仕立てることで、伝統的な刺し子に込められていた知恵と工夫を、世界に誇れる価値として、伝え、表現しているのである。

５．まとめ

高度に発達した科学・技術により、大量生産、大量消費社会が出現し、物質的には、豊かで便利な生活が送れるようになった。しかし、その反面、経済格差の拡大や乱開発、大量の廃棄物による自然破壊などのマイナス面が目立つようになっている[19)]。

国際社会の指標であるSDGsが国連で採択されてから、本年で5年、期限まで10年となった。国谷は「SDGsは2030年に実現したい社会を描いた言わば希望の目標であり、目指したい社会から逆算して今何をすべきかを考え行動をうながす新しいモノサシだ。この新しいモノサシで社会を見つめてみると、これまで合理的で当たり前だと思われてきたものが、実際には環境や社会に害を与え、決して持続可能ではないことを知ることができる」[20)] と述べ

ている。つまり、合理的、効率的と思われていた大量生産も、「SDGsのモノサシ」で見るなら、失った地球環境など多くのものを取り戻すのに、膨大な時間と費用と労力のかかる、非合理的、非効率的なものであるといえる。それは、多くの選択肢の中から、いつでも低価格で流行の服を手に入れられる生活が、多くの資源を無駄使いし、廃棄の際に、さらに自然環境に負荷を与えるという、非合理的で非効率的な生活であることを意味している。

逆に、非効率的な手仕事であると思われる刺し子は、「SDGsのモノサシ」で見るなら、布を丈夫にし、長持ちさせるための効率的方法であるといえるのであり、銀座の技法も、現代社会において非効率的な手仕事であると思われるが、同様に「SDGsのモノサシ」で見ると、制作の際に廃棄がない点、一年中着ることができ、服を長持ちさせることができるなど資源利用の無駄がない点、また、最後の最後までリサイクルが可能であるという点において、自然環境と調和した、持続可能性のある、合理的、効率的仕事であるといえるのである。

このように、大量生産、大量消費の社会に限界が見えてきた現在、日本や世界の各地に残る、生活文化の中に、新しい文化を生み出す鍵が隠されているのではないだろうか。かつての強いられた労苦とも、また単なる趣味とも違う、新しい手仕事は、大量生産の価値観とは異なる「豊かさ」があることを私たちに気付かせてくれる[21)]。持続可能性が求められる社会において、生活文化を受け継ぐ刺し子の技法は、未来につなげるべき、誇るべき財産として、ますますその価値を発揮していくだろう。

６．おわりに

SDGsを理解し、自分ごととして捉える学生を育成するためにはどうすればよいのか。私は、刺し子の服を1枚作ってみることを提案したい。SDGs 12番目の目標に、「つくる責任　つかう責任」が定められている。刺し子の服を作ってみることで、刺し子に込められている、ものを大切にする気持ち、家族を思う気持ちなど、過去の女性たちの知恵や祈りに思いをはせることができる。また、作り手の側に身を置くことで、ものづくりに、どれだけの時間と手間とコストがかかるのか体感することができる。そして何よりも、自ら工夫し創造する喜び、布をいとおしみながら時間をかけて作った服を着る喜びを実感することが、意識を大きく変革することにつながるのではないだろうか。今後、刺し子の制作を通した意識変化の調査なども実施してみたい。

衣料品の大量廃棄にかかわる問題のひとつに、製造過程において、国内の技能実習生や、途上国の女性たち、子どもたちが、低賃金で過酷な労働を強いられているという、大きな人道的問題があるが、その点については、稿を新たにしたい。

謝　辞

10年間、刺し子をご指導くださいました銀座亜紀枝先生に感謝申し上げます。また、刺し子を始めた当初の理想と構想を、思い出させてくださった、平尾和子先生、渡辺浩先生をはじめ、愛国学園短期大学の先生方に、感謝申し上げます。

引用文献

１）仲村和代，藤田さつき．“大量廃棄社会”．光文社新書．2019．68
２）毎日新聞2020年1月29日
３）前掲2
４）前掲1．18
５）前掲2
６）前掲1．38，39，45，55，173，193
７）前掲1．114－120
８）前掲1．128
９）家庭科教育研究者連盟編．“家庭科の授業－実習ガイドブック”．大月書店．2005．75
10）道明三保子．“全アジア・刺し子の系譜”．季刊　銀花．120．文化出版局．1999．52
11）木村操．“新こぎん刺繍入門”．マコー社．1991．34
12）徳永幾久．“山形の四季に祈る－衣服にみるくらしと季節－”．四季の山形　新アルカディア叢書．山形県生涯学習人材育成機構．1996．48－50
13）徳永幾久．“刺し子－針と糸にかけた妻女たちの心意気（米沢）”．日本女性史論集7文化と女性．総合女性史研究会編．1998．230
14）服部真澄．“生きる手がかり幸せのしたく－百徳きもの”．季刊　銀花．147．文化出版局．2006．35

15）杉野公子．刺し子－変化する伝統－．杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要．2008，7，13
16）鈴木博美．“古布でつくる「刺し子」の花びん敷き～ゴミの授業から「刺し子」へ、そしてアジアへ～．月間家庭科研究．245，家庭科教育研究者連盟編．2005．17
17）前掲15．10
18）銀座亜紀枝．“手縫いの洋裁　第1巻”．自然堂．1980．1－4，33
19）春日寛他．新家庭総合21．実教出版．2008．198
20）前掲1．316
21）前掲19．168